

保健科学部における教員相互の授業参観

障害者高等教育研究支援センター¹⁾，保健科学部保健学科鍼灸学専攻²⁾

加藤 宏¹⁾ 青木和子¹⁾ 藤井亮輔²⁾ 森山朝臣²⁾

要旨：保健科学部では平成15年より学部FDの一環として「教員相互による授業参観」を実施してきた。本論では「教員相互による参観」導入の経緯と現在までの経過および現時点における問題点などを報告する。授業参観はおおむね有意義であると評価されているが、マンネリ化、FDとしての位置づけの曖昧さなどの問題もかかえている。

キーワード：教員相互の授業参観，FD，大学教育改革

1. はじめに

高等教育の教育改革が急進している。大学設置基準の改定で平成19年4月から大学院でのFDへの組織的取り組みが義務化され、いずれ学部レベルでも義務化されると予想されている[1]。保健科学部では大綱化直後の短期大学時代から教育改革の一環としてFDや学生による授業評価を実施してきた[2]。また平成15年からは教員相互による授業参観をFD活動と位置づけ、段階的に実施してきた。本論では、保健科学部での教員相互授業参観事業の取り組みを紹介し、その経緯と現状における問題点等を考察する。

2. 大学の教育改革と保健科学部の対応

1991年の大学設置基準の大綱化[3]以降、大学の中でもっとも改革が進んだ部分は「教育」と「自己点検・評価」の分野ではないだろうか。そして、教育改革の3点セットはシラバス・学生による授業評価・FDといわれた。シラバスにいたっては、セメスタ制の広がりとも相俟って平成17年現在、国公立すべての大学（713大学）で作成されている[4]。現状は、改革の第2波として工学系・医療系を中心に、「学士教育のレベル保障の世界標準化」、「単位認定・シラバスの厳格化・規格化」等へとそのターゲットは既に移っている。

保健科学部ではFD活動として各種講演会などを実施すると同時に、平成7年度からは「学生による授業評価」を行ってきた。また、試行期間を含めると平成12年度より順次「教員相互による授業参観」を事業化してきた。因みに文科省が行っている「教育改革進捗状況調査」（平成19年4月発表）では平成17年度集計で「学生による授業評価」は508大学（71%）で、「教員相互の授業参観」は229大学（32%）で、「教員相互の授業評価」は121大学（17%）で実施されている[4]。

3. 保健科学部での「教員相互による授業参観」事業

3.1 「教員相互授業参観」の歴史と実績

保健科学部における「授業参観」の取り組みは、「教員相互の授業参観」として年間計画に事業化される以前から少なくとも平成12年（2000年）5月にはその萌芽的取り組みが開始されていた。FDの一環として実施されたものとしては、同年5月に2週連続して教育方法開発センター（当時）主催の視覚補償機器の使用法と補償機器を活用した授業展開のFDが実施されている。さらに同月には図書館のラウンジ・スペースを教室に、そして図書資料を授業に活用した理学療法学科高橋憲一教授の取り組みが「図書館を利用した授業の可能性」と題した研究授業として公開された。同年10月には鍼灸学科大沢講師（当時）の「視覚部学生に対する生理学実験実習」が公開されている。またこの年度には大学説明会等の機会を利用した受験生や保護者・盲学校関係者等対象の模擬授業の公開もスタートさせている。

平成13年度以降はこの「受験生・保護者」に向けての「授業公開」は、前年度から始まっていた相対話入試の受験生を対象に、入学前に大学の授業を知ってもらう機会としての位置づけも加わり、12月実施が恒例となった。

平成14年になると「独立行政法人化に向けた教育改革その1－授業公開はいかに行うべきか－」（9月18日）というFD講演が開催されている。青木助教授（当時）の「授業を見せるから、授業を観るへ」というテーゼとともに、これが「授業公開から授業参観へ」と視覚部FDの大きな転換点となった。「公開し、「評価を受ける」というスタンスから、「まず、お互いを知ろう」への転換である。これを受け、同年12月には情報処理科の授業が教員向け参観授業として「公開」された。

平成15年度には「教員同士の授業公開」事業となり10月下旬の2週間（短大全年対象2学期）を期間としてWG体制のもと本格的にFD事業化された。患者のプラバ

シーにかかわるような臨床授業等を除いて、公開対象学年の授業は原則的に全て公開、参観者は期間中に2つ以上の授業を参観することとした。この年度においては80%以上の教員が公開側または参観側として参加した。

以降16年度は2月（短大全学年対象3学期）、17年度10－11月（短大全学年対象3学期）、18年度12月（大学1年対象2学期）、そして19年度は11月（大学1・2年対象2学期）にそれぞれ2週間程度の期間で保健科学部の「教員相互による授業参観」は実施されてきた。

3.2 授業参観実施プロトコール

筑波技術短期大学時代および保健科学部での「教員相互による授業参観」は年度により多少の変遷はあるものの、およそ以下の手順で実施されてきた。

- (1) 保健科部教務委員会内の授業公開WGにおいて、その年度の公開実施時期を決める。
- (2) 教員および学生への通知（掲示等により実施期間中は対象学年の授業は原則公開になる旨連絡）
- (3) 授業担当者からの公開可能授業と非公開希望の授業、参観希望者からは参観希望授業の調査
- (4) 「公開授業一覧」、「参観希望者名簿」を全教員に配布し、参観する側とされる側のデータを示す
- (5) 参観希望者による、授業担当者への確認
- (6) 相互参観実施
- (7) 参観後の参観者による授業者への評価・コメントの連絡
- (8) 全教員を対象とした事後評価アンケート

事後アンケートでは事業への参加（授業参観・被参観）の有無、参考になったどうか、事業としての評価等の項目について調査された。

4. 参観事業実施実績について

表1に最近3カ年の本事業の実績と評価を示す。

4.1 事業参加者数の推移

年間事業化された初年度の15年には40名以上の教員がこのFDに参加したが、2年目に参加者は初年度の半数に減じ、最近3カ年の実績では参観をした者も自分の授業を参観された者も十数名程度の低迷状態で安定している（表

1）。これは春日キャンパスの助教以上の教員の約1/4に相当する。また開始当初設けられた2コマ以上という参観目安を指定しなくなったためか、ひとりあたりの参観コマ数も減少傾向にある。

4.2 事業への評価

初年度の事後アンケートにおいては7割強の参加者が「今後の授業改善に参考になった」と回答していた。また今後もこの事業を継続すべきと回答した者も5割を超えていた。次年度以降も現在にいたるまで「参考になった」、「継続に賛成」の回答も事業参観者比率で見ると決して減じているわけではない。全般的に参加者の人数が減って、最近3年の参加者が一定しているのは、いわゆる固定客のみが参加している傾向にあるのかもしれない。

4.3 アンケートの自由記述にみる評価

以下に15年度から19年度の後アンケートの自由記述意見から特徴的なものを列挙する。

教員同士が参観（評価）することについて

- ・予備校の教員に授業を評価してもらう方がよい。教員同士で評価する目的がわからない。
- ・教育実習もうけていない教員に他の教員の授業が評価できるのか。
- ・最近まで大学教員に教授法は求められなかった。学生の学力レベルの低下を理由に教授法を求めるのはどうか。
- ・自分の授業にフィードバックするためであり、人の授業を評価する力は自分にはない。

参観してみたの感想

- ・年間を通じて自由に参観できるようにしないと本当のことはわからない。
- ・自分の気づいていない点を指摘され参考になった。
- ・参観することを意識した授業になっているのではないか。これをもって通常の授業を評価できるのか疑問である。
- ・他の教員の教授方法の良い点あるいは自分が気づかなかった点を知ることができた。
- ・自分の授業以外での学科の学生の様子を知ることができ、学生の新たな側面を知った。
- ・参観した結果をきちんとフィードバックできる仕組みがほしい。

表1 「教員相互の授業参観」参加者の推移と評価

年度	アンケート回答者	参観申し込み者数	1コマ以上参観した者	「参考になった」評価の合計数	自分の授業を公開した者	参観を受けた者	事業継続賛成	事業継続反対	継続：どちらともいえない	継続：その他	継続：NA
2005	25	16	13	11	13	11	15	0	10	0	0
2006	19	14	12	10	15	9	12	0	5	0	2
2007	26	15	12	12	17	13	17	0	7	1	1

- ・同じ教科を教えている他の先生の情報保障の工夫やクラス運営の悩みに気づいた。
- ・自己満足に陥る傾向があったが、他の教員の授業を参観して自分の気づかなかった点が発見できた。
- ・ややマンネリ化しているので、モデル授業を行って参観者で討議するというような企画も取り入れたらどうか。
- ・自分もふくめて、もう一度視覚障害者への対応の仕方や指導について研修を受けた方がよいと思った。
- ・自分の所属する大学について学ぶ機会になった。これからは本学を見学者にも説明しやすくなる。
- ・講義についてはお互い言いにくいこと聞きにくいことがあると思った。
- ・1コマ通しで見る時間がとれない。半分だけの参観もあった方がよい。

参観を受けた立場での意見

- ・自分の授業を改善しようと意欲が高まった。
- ・参観者がいるいないにかかわらずいつもの授業を行いました。
- ・授業者は参観者を選べないのか。
- ・参観者が途中で退室したり、マナーができていなかった。
- ・参観者のマナーおよび参観を受ける側の準備等についてのマニュアルを整備すべきではないか。
- ・授業を批判するのではなく建設的な意見を出すべきである。
- ・参観者の意見が高所から批判しているようで不愉快な思いをした。
- ・授業参観の主旨を理解していない教員がいる。
- ・自分の授業を振り返る機会になった。
- ・学生ばかりでなく教員に聴講されると思うと緊張し、講義内容の点検を行った。
- ・普段取りに授業を行った。
- ・新任や授業経験の少ない教員には良い取り組みだが、一方ベテランは徐々に参加意欲が低下していくようだ。
- ・自分の授業を振り返るチャンスになるので、時々参観を受けることはよい。
- ・あまり意味がないと思う。
- ・見に来ていたなという感想のほか、特になし。
- ・参観希望者があればいつでも受け入れたい。

参観事業の今後に向けて

- ・評価内容を管理者・職員・学生に公開すべきである。
- ・年間を通じて自由に参観できるとよい。
- ・勤務評定にはつなげないで欲しい。
- ・ルーティン化しないように少しずつ変化を持たせるのがよい。

- ・少なくとも自分の所属する学科の授業は参観するべきだ。
- ・参観後に全体で討議するのがよい。
- ・すべての教員が授業公開を行い評価を受けるべきだと思う。
- ・今後も継続するのであれば、そろそろ事業を次の段階に進めるべきである。
- ・参加教員が少ない。全体的な討論会を開いて教員相互に教授能力の向上を目指す機会にすべき。
- ・全科目公開すべき。
- ・期間が短いので、参観のチャンスを逃してしまう。もっと期間を広げて欲しい。
- ・FDなどで教員全体のコンセンサスを得て、実施することが望ましい。
- ・学生の中には参観させることを好まず、故意に欠席する学生もいる。
- ・もとより「理想の授業」などはるはずもなく、あくまで自分の授業を振り返るきっかけだと思う。
- ・もう少し具体的な目的があると良いと思う。
- ・他大学では「学生による授業評価」や「参観」を受けた上で、では次年度の授業運営をどう改善したいかという「自己評価レポート」の提出を義務化している。このような取り組みが必要なのではないか。
- ・「授業参観」も「授業公開」も教員個人の裁量に委ねられているが、毎年交代で数人の教員の授業参観を通して討論会を行うような企画にしたらどうか。
- ・参観する側、される側の意見交換等のフィードバックの仕組みが必要。
- ・見たい人、見られたい人が随時個別に頼めば良いことで、「公開」というのは外向けのメリットためではないか。
- ・参観後何らかのことをすべき。今年も単に参観で終わっており、マンネリ化していると思う。
- ・他人の授業成果を利用するのは著作権侵害ではないか。
- ・大学教育をマニュアル化しないことと「学部教育の世界標準化」のすりあわせが求められている。
- ・毎年非公開を続ける教員がいる限り、公平性に欠けるのではないか。
- ・参観直後に結果をデিকッションすると良い。

4.4 事業への意見のまとめ

4.3. に列挙したものの以外の意見も含めて、自由記述意見を集約すると概ね事業の意義は評価されていた。評価する意見としては、以下の通りである。

- (1) 事業は全体的には有意義と評価できる。
- (2) 日頃の学生の学習態度・知らない側面を知ることが出来る。

- (3) 自分の授業を振り返るのに有効である。
- (4) 新任の教員の研修や情報保障の方法を知る機会となった。

ただし、指摘された問題点も多く、

- (5) 教員に評価能力があるのか。
 - (6) 参観者・被参観者のルールが必要である。
 - (7) 体制や手順などを見直す必要がある。
 - (8) 目的・意義が不明確である。
 - (9) マンネリ化の打開策が必要である。
 - (10) フィードバック体制の構築が必要である。
 - (11) 他の評価や点検事項との関連が問題である。
- などの意見があった。

5. 本事業のかかえる課題と今後に向けて

総括としては、FDとして位置づけられた初年度以降は参加人数が減少傾向にあり、現状では事業として成功しているとはいえない。これには1年目こそ2コマ以上の「参観（見学）義務」があったのに対し、2年目からは明確な努力目標等も提示されなかったことも影響しているであろう。「教員相互の授業参観」に先立ち平成7年から開始され10年以上の実績のある「学生による授業評価」にもマンネリ化の問題はある。「授業評価」についても結果の公表に関する論議やFDとの連携は導入当初に比べ近年は低調である。しかし、「授業評価」は、非常勤も含めて基本的に全科目実施という体制が確立している。「授業参観」も各年度の実施期間中は、原則的に「全授業は公開」とされているが、実際には担当教員が「非公開」とすることも可能である。この強制性が緩いことが「授業参観」の低調さの原因のひとつと考えられる。

さらに大きな要因は教員からの意見にもあったが、事業の「哲学・コンセプト」の論議不足、不徹底が指摘できるであろう。スローガンは「学生による授業『評価』とは異なった視点で、素直に他の教員の授業を「観てみよう、知ろう」であったはずだ。しかし、当初から実質的なノウハウの蓄積につながらないのであれば意味がないという意見もあり担当委員の議論も深まらなかった。「見せるから観るへ」で開始された「教員相互による授業参観」であったが、同時進行していた「教員評価」方法の策定の流れとも混同されたことも大きい。さらに当時本学は短大から4

大への移行期にあたり、担当委員の所属部局が分かれたことも議論の深化を妨げた要因である。現在、保健科学部には「授業評価等委員会」があり、ここに「FD企画」、「学生による授業評価」、「授業公開推進（教員相互による授業参観）」の3部門が含まれる。この委員会にこの事業を立ち上げた旧教育方法開発センターからの委員も参加している。「教員相互の授業参観」は発足後の実績を検証し、再度原点に立ち返ってその目的から議論する必要があるであろう。

大綱化以降ほとんどの大学で採用されていた「学生による授業評価」をコストに見合わぬという理由から中止した大学も出現してきている。大学の教育改革事業が単なる運動になってしまい、実質的な効果を上げていないという指摘もある[6]。「学生による授業評価」も「授業参観」も比較的導入が早かった本学であるが、学部へのFD義務化の前夜のこの時期にもういちど教育各事業全般を見直すべき時に来ているのかも知れない。本学の設置審後の教育課程はこの議論の上にはしか構築できないと考えるべきである。

謝 辞

本取り組み初期の実現に関しては、現目白大学保健医療学部教授前島徹氏の貢献が大きい。ここに記して感謝します。

文 献

- [1] 大学院設置基準第14条の3
- [2] 森山朝臣・宮川正弘・小池勝明・加藤 宏・大武信之：平成7年度視覚部における学生の授業評価実施報告，筑波技術短期大学テクノレポート，4：(15-20)，1997。
- [3] 絹川正吉：「大学教育の思想 学士課程教育のデザイン」，東信堂，東京，2006。
- [4] 文部科学省高等教育局大学振興課：大学における教育内容等の改革状況について(2007/04/16)，http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/19/04/07041710/001.pdf
- [6] 苑 復傑・清水康敬：大学教員の教育力強化とメディア活用—アメリカの事例分析とその含意—，メディア教育研究，4(1)：(19-30)，2007。

Teachers' Class Visiting in the Faculty of Health Sciences

KATOH Hiroshi¹⁾, AOKI Kazuko¹⁾, FUJII Ryouzuke²⁾ and MORIYAMA Masatomo²⁾

¹⁾Research and Support Center on Higher Education for the Hearing and Visually Impaired,
National University Corporation Tsukuba University of Technology

²⁾Course of Acupuncture and Moxibustion, Department of Health, Faculty of Health Sciences,
National University Corporation Tsukuba University of Technology

Abstract: Since 2003, we have been conducting a teachers' mutual class visiting exercise as part of the practice of Faculty Development in the Faculty of Health Sciences. This paper takes a brief look at the history and progress of this trial program, then reviews the current issues related to this practice. Mutual class visiting is highly evaluated by teachers. However, there are some problems to be solved, i.e., how to redefine the purposes and avoid getting into a rut and also how to effectively place this practice into FD activities in our faculty.

Keyword: Teachers mutual class visiting, FD, Educational reform in universities

